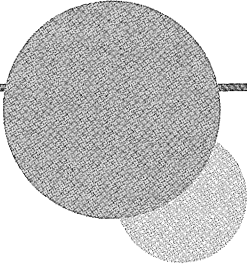


難しく、効率的に運営されなかった部分が多かったようです。今回のような災害が起こった際の対応に

ついて大学、公的機関も含めて今後さらに練っておく必要があるように感じました。



## 地震災害ボランティアに参加して

自然科学研究科修士2年 松田武嗣

10月23日中越地震発生時、私は酒屋でアルバイトをしていた。目の前で棚から酒瓶が次々と落下し、大変な地震であると感じた。その後、不安を抱えながらアパートに帰ったが、なんら被害はなく、地震があったことなど忘れて遊びに出た。しかし次の日、親戚や友人からの連絡と大々的に放送されるニュースを見て愕然となった。自分のアパートから数十キロしか離れていない地域では、崖が崩れ、民家は倒壊して大きな被害が出ていたのである。そのため何か手伝えることがあればやりたいとは考えたが、一人でボランティア活動に参加する気にもなれずにいた。そんな時、「農学部のボランティア活動の先発隊として小国町へ行かないか。」という連絡があり、すぐ参加することに決めた。

ボランティア活動当日、小国町へ向かう途中にあるきれいに整備されていたはずのバイパスは、所々陥没して大きく波を打っていた。そして更に近づいていくにつれて、電信柱は傾き、川沿いの道は崩れ落ち、人々が片付けにおわれている様子が多くなっていった。

やっとのことで小国町役場に到着したが、ボランティア活動の登録をする際に「もうボランティアのするようなことはありません」と言われた。来る途中にあれだけの光景が広がっていたにもかかわらず、なぜやることがないのか不思議だった。そうは言われたものの何かすることはできないかと森光集落へ行き、集落内を回ってみると確かに民家は傾き、道路は崩れている。これでもやることはできないのかと住

民の方と話をし、ひび割れて陥没した公園の補修と、崩れた石垣の撤去作業を行うことになった。降りしきる雨の中、公園にブルーシートを張り、用水路に落ちた石垣の引上げを行い、一日目の作業は無事に終了したが、なぜ民家の片付けの手伝いがなかったのか疑問だった。

二日目は山間部にある集落に行き、活動を行うこととなった。その集落は、山は崩れ、十戸程度ある民家のほとんどが基礎からずれる等の大きな被害を受けており、このままでは集落自体がなくなる可能性すらあるという状況におかれていた。

その集落を回り、住民の方に何か手伝いできることはないかと聞くと、「自分達でも何をしたいかも分からないので、ボランティアの人達に何かしてくださいと指示は出せない。けれども、嫁入りの時に持ってきた箆笥を二階から運び出してほしい。」と言われたため、家の中に上げてもらうことになった。家の中に入ってみると、窓は割れ、家財道具は散乱しており、正しく足の踏み場もないと言うのに相応しかった。

この時、「自分達でも何をしたいかも分からないので、ボランティアの人達に何かしてくださいと指示は出せない。」と言われたことと、自分の目で荒果てた民家の中を見たことで、なぜ一日目に民家の片付けの手伝いがなかったのかが理解できた。住民の方はやるが多すぎて何から手をつけていいのか分からず、指示が出せないために民家内での作業がなかったのである。その理解によって、私は役

場と住民の方々の言う「ボランティアの人達がやることはありません」という発言の間には違いがあると感じた。役場での「やることはありません」という言葉は、ボランティアがやるべき仕事はもうないという意味であった。しかし、住民の方はやらなければいけないことを山のように抱えてはいるが、何から手をつけていいのか分からずに「やることはありません」と言っていた。つまり、一定の時間が経って冷静に何をすべきか考えることができるようになれば、ボランティアに何をしたいか指示が出せるようになる。このことから、この先もボランティアのできる仕事はまだ出てくると思った。

私はボランティア活動に参加し、住民の方々と話しながら被災地を自分の目で見ると、地域住民の方々の心に負ったダメージが回復するには長い年月がかかり、また地域の復旧にも大変な時間が必要で、どちらの傷も完全には回復できないということを知った。

また最近感じるようになったのは、市街地や震源地に近い地域の報道はされているのに対し、ボランティア活動に行った小国町といった、震源地から少し離れたような地域の報道がほとんどされていない

ことである。報道されない、震源から少し離れた地域であっても、深刻な問題を抱えている。報道されている地域に対する人々の関心は高く、ボランティアが確保されていることは予想できるが、報道されていない地域にボランティアが集まるとは考えにくい。そのためこのような地域において、積極的にボランティア活動を行っていかなければならないのではないか。

最後に農学部の地震災害ボランティア活動は、冬場に向けて増加していくものだと思っていたが、最初の活動以降は何もなく、継続されていなかったことを残念に感じる。しかしながら、地震発生から時間が経過して地域住民の方々もある程度の落ち着きを取戻し、春になると本格的な修復作業や農作業が開始されることから、ボランティア活動の必要性は新たに出てくると考える。そのため、農学部のボランティア活動は報道されていない地域において再開されることを強く望む。そして今後のその活動は、単発的で話題作りの活動ではなく、長期にわたり地域住民の方々のためを思って継続される活動でなければならないのではないか。